

メタセコイア

(土屋中学校の樹)

第2号

令和6年5月7日発行
さいたま市立土屋中学校
さいたま市西区土屋1766-1
Tel 048-622-4611
✉ tsuchiya-j@saitama-city.ed.jp

<学校教育目標>

夢に向かって

～生徒には夢を 保護者には感動を 職員には技を～

母の日

～昔も今もこの先も出産は命がけ。よって、毎日を母の日とする。～

校長 澤田純一

俳句歳時記の中には、これも春の季語？と改めて認識する言葉があります。例えばしゃぼん玉、ぶらんこ、風船です。風景を想像してみると春うららかな季節に合うものと分かります。今年はそのような春が短くなり、冬から夏へと一気に季節が変化したように感じます。バイカーとしては春のツーリングは最も好感のもてる季節なのですが残念ですね。そのような中、定峰峠を流していると、気温は高いですが確かに春を感じられることが目に飛び込んできます。そうです、新緑です。日光を浴びその鮮やかな緑色なこと。このような美しい緑がほかにあるのだろうか、と思うほど見目麗しいのです。厳しい冬を耐え抜いた木々の新緑の色は決して絵具やCGのような人工物では表すことはできない自然の生み出す芸術と思うのです。そして、新緑と生徒の皆さんが重なって見えますね。これから成長していくことがそっくりなのです。ちなみに私を木に例えると、秋の枯葉（紅葉）というところでしょうか（笑）

新緑と枯葉に思いを寄せていると、私にも新緑の時があったことを思い出します。新緑の頃、すなわち子どもの頃の思い出と言えれば母との思い出ばかりで、実はあまり父との思い出は残っていないのです。母との思い出はたくさんあるのですが、その中の一つをお話ししましょう。そのころ、新緑とはいえ病弱だったことに始まります。私は4歳のころ小児喘息を患っていました。呼吸が苦しくなることもしばしばありました。幾度となく母に背負われていましたね。当時、川越市には喘息の専門医がおらず、毎週土曜日になると東京の中野まで片道1時間半をかけ治療に行くのです。元気な時は母と旅行気分で電車に乗り、治療の後には食事をしながら帰ってくるのが楽しくもありました。しかし、ある日、通院中に発作が出てしまい、苦しくて駅の階段を上ることができません。乗り換えの池袋駅、新宿駅、中野駅の階段を母に背負われ病院まで行ったことを覚えています。今に思えば「きっと重かったろうな。そう言えば、体力がつくように剣道を習わされたっけ。」と心の中でつぶやきます。

40年前に父が他界し、姉は結婚し、母と二人で過ごしたことや、仕事を辞めて悲しませたこと、私が結婚した時の嬉しそうな顔など、ヘルメット越しに視界に入っては消えていく景色のように様々な思い出が走馬灯のごとく流れていきました。

現在、母は93歳です。最近、自力で歩くことが困難になりました。加えて視力や聴力も落ちてきました。母はいつまで新緑を見ることが出来るか分かりませんが、私は、子としての覚悟があります。それは、心の中はいつも「母の日」であることです。そして、次は私が母を背負う番です。なにより命がけで生んでくれたのですから。

皆さんも自分を生んでくれた母親、育ててくれた家族、そして自分に関わってくれた人を思い出してみましょ。きっと、かけがえのない思い出とともに、感謝の念がわいてくるはずですよ。

今日の話はこれでおしまい。素敵なGWを過ごしましたか？暑くなってきましたが体調に気を付けて5月も頑張りましょ！